

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

最終報告提出日 未定

派遣生の基本情報

氏名 太田泉 フロランス

所属先 東京大学大学院修士課程人文社会系研究科基礎文化研究専攻(美術史学) 二年

派遣形態 個人派遣

研究課題名

日本語：『聖遺物容器を中心としたフランス中世の金細工作品と絵画におけるその表象についての研究』

フランス語： *Une étude sur l'orfèvrerie du Moyen Âge en France y compris les reliquaires et ses représentations dans les peintures*

派遣先での活動

(1)派遣先の基本情報

国名 フランス共和国

都市名 パリ

研究機関名 国立中世美術館（クリュニー美術館）、Institut National d'histoire de l'art (INHA)、Institut de recherche et d'histoire des textes(IRTH)、フランス国立図書館、ルーヴル美術館、ノートル・ダム大聖堂宝物室、サント・シヤペル、サン＝ドニ大聖堂宝物館、パリ装飾美術館、Saint-Louis-En-L'ile 教会など

(2)派遣期間

出発日 2012年6月26日、帰国日 2012年9月24日、総日数 91日間

主な研究成果

(1)当初の計画の概要：東京大学大学院の修士論文としての「聖遺物容器を含むフランス中世の金細工作品と絵画におけるその表象についての研究」を完成させるための調査。①聖遺物及び聖遺物容器と王権の緊密な関係についての実態を探ったうえで、作品が保持していた力及び影響力の実態について考察し、②①に基づき当時の貴族社会において金細工師が果たした役割及び宮廷内での芸術の在り方の調査、③金細工工芸とその他の芸術作品の関わりを調査し、その

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

成果に基づき、両者の相関性に関して普遍的な解釈構造を形成することを試みる。

**(2)実際に達成された成果**：ルーヴル美術館やクリュニー美術館での調査において、荊冠の棘の聖遺物が当代において非常に珍重された事を再度確認し、それを軸として、受難の聖遺物を納めた容器をリスト化し、実見した。(図版 1,2 は作例。筆者撮影) また、それらの聖遺物容器が制作された当時、どのような場所にどのように置かれていたのかを視覚的に復元するため、多数の大聖堂、教会、礼拝堂等を訪れ、調査を行った。(図版 3 はその一例。筆者撮影) フランス国立図書館及び国立美術史研究所(INHA)の図書館では、金細工作品の制作と同時代の、異なるメディア(主として写本彩飾)におけるその表象や、作品の制作に拘る文書などについても調査を進めることが出来た。また、国立図書館メダイオン室においては、フランスの王家や教会の宝物作品が観察可能であり、金細工作品でも、絵画でも写本でもない、従来あまり研究が活発ではない事物に関する調査を行うことができ、中世におけるコレクションの知られざる一面を再構成するための大変重要な資料を得ることができた。また、キリスト教教会にて実際に行われている宗教典礼を観させていただくことができ、聖遺物



及びそれを納める聖遺物容器という“物”と、生きた宗教の間の密接な関わりを体験することができた。この件に関しては、日本で多くの文献を読んでいたため、ある程度理解の素地があると思いついていたが、現場の雰囲気、信徒の崇敬行動などは想定していたものよりもはるかに強烈な印象を与えるものであった。このようなことを実際に体験してみることなしに、研究を続けて行くことは、極めて困難であると同時に恐ろしいことであるように思われる。

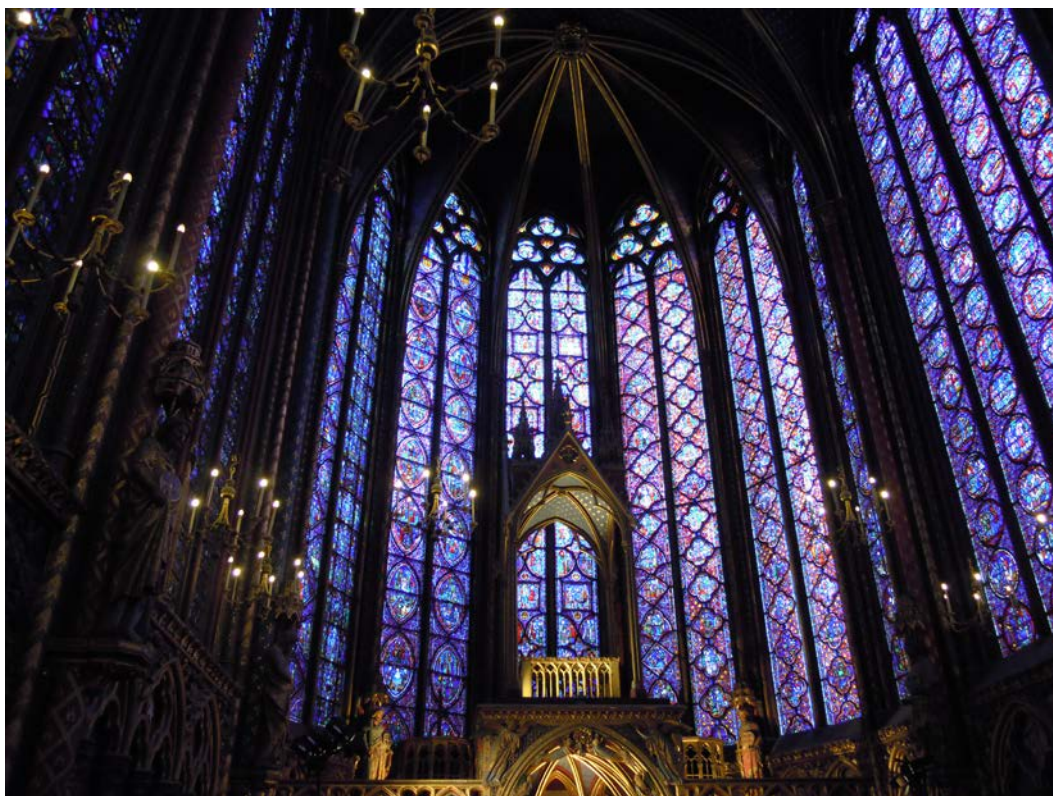
←「打擲」の聖遺物容器、ヴェネツィア、15世紀後半、ルーヴル美術館

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

↓メダル型聖遺物容器、パリ？、1370-1380 頃、クリュニー美術館



↓パリ、サント・シャペル内部



東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

**(3)今後の研究展望**：当面の研究計画は、本年度提出予定の修士論文の完成である。イエス・キリストの受難の聖遺物、特に荊冠及びその棘を納めた聖遺物容器の造形を中心に、西洋中世における金細工作品をより高い精度で他のメディアとの比較も行いながら、美術史の文脈上に位置付け直すことが目標である。今後は、金細工作品の研究を進め、テクニックや素材、そして売買市場の精査など、日本で現在十分になされているとは言いがたい西洋工芸研究を活性化させていきたいと考えている。